

‘呪われた血’の叛逆詩人

George Gordon Byron

楠 本 哲 夫

目 次

序章——バイロン文学の基調——

〔I〕はじめに

〔II〕人間バイロンか 詩人バイロンか

〔III〕バイロン文学への批判

〔IV〕呪われた血—非運の家系

〔V〕おわりに

(未完)

〔I〕はじめに

人は神を ^{せんさく} 穿鑿すること なかれ と シルレル は言った。

ジョージ・ゴードン・バイロンは星の子、運命の子、神を呪い、世に挑み、毅然たる姿を崩さなかった勇者であった。

北欧の海豪 バイキング Viking の血をひく George Gordon, 6th Lord Byron, (1788-1824) は その妖しき、^{あや} 腥き ^{なまぐさ} 血の騒ぐまま 奔放不羈に 自己をのみ、徹底してうたいつづけた。自我の詩人であった。

熱血詩人、そして、スコットランドの産んだ叛逆詩人、そして、——シェクスピア以来の天才詩人であった。

その36年の短い生涯は——

幼い思慕をよせたマーガレット・パーカーの死、に愛と別離と憂愁を、メアリー・ジョーワースへの失恋に、裏切と虚無と冷笑を知り、少年期すでに、己が人生の死を凝視つめ、死地を、終着を、ひたすらに欣求した。バイロンは

短い生涯を直線的に走った。

1824年1月、号砲と歓呼を浴びながら真紅の軍服を身にまとい、ギリシャ独立軍司令官として義勇軍を指揮した。

4月18日、豪雨一発熱一激しい悪寒一意識不明一譚言で進め！進め！と叫んだ。

翌19日、午後6時15分、息絶えた。

バイロンの犠牲と死は、祖国英国の世論を動かし、カンニング内閣の外交政策の全面的転回、—1827年、ナヴァリーの海戦で、英仏露の連合艦隊はギリシャの独立を保証した。

バイロンの義挙は人類史にのこる 名誉ある金字塔であった。

バイロンのつつ走った生涯は、見事に描かれた、鮮烈な、幾何的直線であった。

‘England! with all thy faults I love thee still,’

I said at Calais, and have not forgot it;

英国よ！われ我、汝を愛す。

あまたの 瑕疵の あるがまま

祖国の岸辺去らむとて

カレーの波浪に かく呼びし

ことばは、今も、胸にあり。

祖国を愛するがゆえに、祖国英国を追われる如く、巡礼の旅に発ち、遂に不帰の客となったバイロンの遺骸は、故国に送られ、ニューステッド・アベイに

近いハックナル・トーカード村の小さな教会の、バイロン家の祖先の墓所に葬られた。

とき、1824年7月12日。ウェストミンスター寺院は 埋葬を拒絶。

George Gordon 6th Lord Byron は19世紀という動乱の時代の生んだ最初の近代詩人であった。

中世風な道徳世界、に回顧的であり、前近代的な世界に対して 憧憬にみちた詩風に対し、現実、フランス革命を経過して、近代的自我の自覚を基にした、新しい人間性の確立へと躍進しようとする社会であった。自我にめざめた詩人を要求した社会であった。

19世紀前期ロマン派詩人たちの中、一ワーズワス、コールリッジ、スコット、サウジーら——所謂、The Laker 湖岸詩人らに対し、バイロンは 悪魔派 Satanic School 三星（バイロン、シェレー、キイツ）と共に 敢然と戦いを挑み、詩運動を展界した。その挑戦的態度は壯観なまでに『喧嘩バイロン』の本領を ほしいままにした若き日の姿であった。

生命の炎 ^{いのち ほむら} 燃えつきる日まで、うたい継がれた ^つ バイロンの うた—— あるときは、吼ゆる如く、あるときは、泣哭する如く、あるときは、わだつみのたたへる如く、あるときは、湖底に溶けゆく琅玕の珠 ^{たま}の如く耐えた、その詩 ^{うた}の調 ^{しらべ}は、荒れ狂う、^な 屈ぐ、^{しづ} 歎息する、沈む、その、^は 瞬時のころの、^{うた} 投影であった。

バイロンのリリズム が燃えつきんとする日——諦観の境地を うたった——‘この日、ぼくは三十六歳の生涯を終わる’——は、

自我に苦悩した詩人の 最後の誕生日に洩らした崇高な感懐——辞世の歌である。

陣中にて義勇軍の士気を鼓舞しつつ自らの ^{うつろ} 移いゆく、消えゆく情熱の ^{ともしび} 灯の揺らぎを ^{みつ} 凝視めつつ臨終のきわみまで自己の榮えある死地を求めんとしたその心境は詩人として崇高であり、人間バイロンの姿が切々として心をうつ千古に

のこる名詩である。

ON THIS DAY I COMPLETE MY THIRTY-SIXTH YEAR.

1. 'T is time this heart should be unmoved,
 Since others it hath ceased to move:
 Yet, though I cannot be beloved,
 Still let me love !
2. My days are in the yellow leaf;
 The flowers and fruits of Love are gone;
 The worm, the canker, and the grief
 Are mine alone!
3. The fire that on my bosom preys
 Is lone as some Volcanic isle;
 No torch is kindled at its blaze—
 A funeral pile,
4. The hope, the fear, the zealous care,
 The exalted portion of the pain
 And power of love, I cannot share,
 But wear the chain.
5. But 't is not *thus*—and 't is not *here*—
 Such thoughts should shake my soul, nor *now*
 Where Glory decks the hero's bier,
 Or binds his brow.
6. The Sword, the Banner, and the Field,
 Glory and Greece, around me see!
 The Spartan, borne upon his shield,
 Was not more free.

7. Awake! (not Greece—she is awake!)
Awake, my spirit! Think through *whom*
Thy life-blood tracks its parent lake,
And then strike home!
8. Tread those reviving passions down,
Unworthy manhood!—unto thee
Indifferent should the smile or frown
Of Beauty be.
9. If thou regret'st thy youth, *why live?*
The land of honourable death
Is here:—up to the Field, and give
Away thy breath!
10. Seek out—less often sought than found—
A soldier's grave, for thee the best;
Then look around, and choose thy ground,
And take thy Rest.

Missolonghi, *Jan.* 22, 1824.

[Firs published, *Morning Chronicle*, October 29, 1824]

1 [“This morning Lord Byron came from his bedroom into the apartment where Colonel Stanhope and some friends were assembled, and said with a smile— ‘You were complaining, the other day, that I never write any poetry now:—this is my birthday, and I have just finished something, which, I think, is better than what I usually write, He then produced these noble and affecting verses, which were afterwards found written in his journals, with only the following introduction: ‘Jan. 22; on this day I complete my 36th year.’”—*A Narrative of Lord Byron's Last Journey to Greece*, 1825, p.125, by Count Gamba.]

‘この日、ぼくは三十六歳を終わる’

(1) いまとなって、この胸は、ものに動かされるようなことがあってはならぬ。

すでにして、ぼくが、他のひとの胸を動かすようなことはないのだから。
しかもぼくが、ひとから愛されなくなったとしても、
ぼくをして、ひとを愛さしめよ！

- (2) ぼくの日々は、すでにして、黄ばんだ木の葉にひとしくなった。
「恋」の花々も果実も、すでに遠くにすぎ去った。
木々をむしばみ食いあらず害虫にひとしい、あの苦悩ばかりが、
ぼくの持ち物のすべてとなった。
- (3) ぼくの胸を悩ましているこの火は、
どこやらの「火の島」のようなさびしさだ。
その焰には、たいまつの明るい光ひとつかがやいてはいない——
火葬用の薪の山でしかないのだ。
- (4) のぞみ、恐れ、心を熱中させる事柄、
痛みを分かち合う気高い行為、そして、恋の力——
こういったものにも、すでにして、ぼくはあづかることができない。
ぼくが身に帯びるものといつては、ただ鉄鎖があるのみ。
- (5) しかし、ああでもない——こうでもない——などと
そんなことを思って、ぼくのこの魂をゆり動かしてはならないのだ。
いまとなつては、この地上の「栄光」のみが、^{ヒーロー}勇士の柩を美しく飾って
くれる。
勇士の額をかがやかしてくれる。
- (6) 剣よ、軍旗よ、戦場よ。そして「栄光」よ、ギリシャよ。
ぼくのめぐりに、いま、それらが見える！
楯の上に生をうけたあのスパルタ人ととも、
これほどに自由ではなかったのだ。
- (7) 目をさませ！ (いや、ギリシャにむかって言うのではない——ギリシャ
はすでに目をさましている！)
目をさませ、ぼくの魂よ！ 思いみよ、いったい「何人」をへて、
おまえの生命の血は、その父母なる水源地より流れきたったものだった

かと！

いったい「何人」をへて、その核心を掴むことができたのかと！

- (8) またしても燃え上がろうとしてくる情火の焰なんぞは、踏みにじってしまえ。

かちなき壮年よ！——そんな焰なんぞ踏みにじってしまえ。

いまとなつては、「美しい人」が微笑しようとは不機嫌になろうと、そんなことはぼくには、どっちでもかまわない。

- (9) もしも、おまえが、自身の青春を悔いているなら、なぜに生きながらえるのか？

荣誉ある死をとぐべき国が、ここにあるではないか。

たしかに、ここにあるのだ。——いざ、戦場へ馳せ行けよ。

そして、おまえの息をたえしめよ！

- (10) さがし当てよ、兵士の墓を。——なぜって、それはさがさなくては見つからぬのだから。

しかし、兵士の墓の一基こそ、おまへにとって、至上のすみかとなつてくれよう。

そのあとで、あたりを見回せよ。そして、おまえの果つべき大地を選定せよ。

そのあとで、おまえの「永き眠り」につけよ。

(訳一齊藤正二)

バイロンの辿りついた世界は、——

自分を取りまく周囲の世界に、道德秩序に不満をもち、反逆し、地平の彼方に、彼岸に、新しい時間と空間の存在を希求した。そして辿りついた。

バイロンの詩は、傷つけられ、苦悩する魂の彼岸への到達を強く訴えたその迫力のゆえに、イギリス人のみならず、ひろくヨーロッパの、そして本邦の読者に愛唱された。

バイロンの訃報に接したゲーテは、世紀の最も美しい星が沈んだことを嘆き、Faust、第二部において、Faust と Helen の息子 Euphorion の姿の中にバ

イロンのための記念像を打ち建てたと言われる。

Faust は Romanticism を、ギリシャの美女 Helen は Classism を表すもので、両者の愛児としての Bylon 像¹⁾が、Bylon 文学の本質の具現と考えてよいのだろうか。

〔Ⅱ〕‘人間’バイロンか‘詩人’バイロンか

文は人也。この第一原理は follow されなければならない。偉大なる詩人の訴えようとするものは何か。

詩は ^{うた}訴である。詩人が ^{うた}生命の ^{うた}すべてを ^{いのち}かけて ^{うた}訴う ^{しらべ}韻律である。

^{ホトトギス}時鳥が ^{うた}血を吐きながら ^{うた}うたい ^つ継いだ ^{うた}韻律が、——バイロンの ^{うた}うたである。

処女詩集 Hours of Idleness (懈怠集), ——チャイルド・ハロウルの旅
—カイン—ドン・ジュアン—海賊—マンフレッド—そして, ——

On This Day I Complete My Thirty-Sixth Year

‘懈怠集’に観る愛と ^みpathos の ^{ほのほ}炎は揺らぎつつ、燃えさかり、うち上げ花火のごとく華麗に炸裂し流星のごとく消えた。

‘懈怠集’に始まる珠王の名詩のかずかずをのこし ‘この日、36才のわが生涯を絶つ’とき彼岸に栄光の居所を ^{ごんぐ}欣求して ^{さまよ}彷徨った心境は——Faust の “Es war ein “König in Thule” (昔ツウレに王ありき) ^{ほうふつ}を彷彿させる。

ES WAR EIN KÖNIG IN THULE (Goethe)

Es war ein Köning in Thule,
gar treu bis an das Grab,
dem sterbend seine Buhle
einen goldenen Becher gab, usw.

Es ging ihm nichts darüber,
er leert' ihn jeden Schmaus;
die Augen gingen ihm über,
so offer drank dacaus, usw.

注1) 上杉文世氏：バイロン研究

Und als er kam zu sterben,
zählt' er seine Städt' im Reich,
gönnt' alles einem Erben,
den Becher nicht zugleich, usw.

Er sass beim Königsmahle,
die Ritter um ihn her,
auf hohem Vätersaale
dort auf dem Schloss am Meer.

Dort stand der alte Zecher,
trank letzte Lebensglut
und warf den heil'gen Becher
hinunter in die Flut, usw.

Er sah ihn stürzen, trinken
und sinken tief ins Meer.
Die Augen täten ihm sinken,
trank nie einen Tropfen mehr, usw

昔ツウレに王ありき。
ちかい か
盟を渝へぬ 此君に、
いも かがね
妹は黄金の杯を
のこ
遺してひとりみまかりぬ。

こよなき宝の杯を
乾しけり宴の度毎に。
此杯ゆ飲む酒は
涙をさそう酒なりき。

死なん日近くなりし時
あかた
国の梟の数々を
よつき
世嗣の君に譲りしに、

かの杯は^と留め置きぬ。

海に臨める^き城の上に

王は宴を催しつ、

^{ますらを}壯士あまた宮のうち

^{おまし}御座の下に集ひけり。

これを限りの命の火

盛れる杯飲み干して

その杯を立ちながら

海にぞ王は^て投^げて^ける。

落ちて傾き、沈み行く

杯を見てうつむきぬ。

王は宴の果てより

飲^まず^なりに^き零^だに。

(ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(訳)森 欧外)

北溟の王の海に投げすてた杯は、バイロンの踏みにじった情火の焰でもあつた!!

Tread those reviving passion down,
Unworthy manfood! unto thee
Indifferent should the smile or frown
of Beauty be.

ぐっと耐えているバイロンの真紅の胸にも、^{うたげ}愛の宴の^{はるか}香なる過し方が去来したことであろうものを。

人^間バ^イロ^ンか、詩^人バ^イロ^ンか。

ここに、バイロン研究の大きな課題がある。あまりにも強烈な個性の詩人、^{エゴイステック}自 我の詩人、詩人としての使命に徹してうたいつづけた詩人であり、うたうことを止めるならば発狂^{くるっ} mad たであろう詩人であったから。

——自づ^みから、言明したように、この襲^{うた}いくる激情 *passion* を うたわねば自分は狂う。と——

To withdraw myself from myself (oh that cursed selfishness!)
has ever been my sole, my entire, my sincere motive in scribbling
at all. (Byron's Journal under 27 Nov. 1813)

彼の場合、詩うことは、呪^なはれた自分 から自らを脱却したい一念のゆえに、とその詩作の動機をのべている。詩うことは呪^なわれた自己を嫌^{うた}悪し吐きだすことであった。これが彼の詩の根本理念であった。

ゲーテのみならず、シェレーも Julian and Maddalo の序文の中で「彼は最も完成した天才だ。そして彼が、自分の精力をその方向へ向けさへすれば、腐敗した祖国の救済者たり得よう」と、象徴的な言葉をのべている。

しかし——詩人バイロンへの、この絶大なる讃辞も、もろにこれを受けとめることが許されるのだろうか。

〔Ⅲ〕バイロン文学への批判

ここで——しづかに、詩人バイロンに、冷酷にメスをあてる斯界の権威者達のかえを拝聴しよう。

そのこえ (失礼を顧みず敬称を略させて戴き)

1. 詩人バイロンの評価はその浪漫的性格として再三^三乱高下^{高下}したが今や落付く処に落付いた観がある。(白夏耿之介、鈴木信太郎、石川道雄、神西清、諸氏鑑選名詩名訳集)

2. 以下——西脇順三郎氏と山本健吉氏との対話である——

(Y) 古今を通じて第一番の詩人はだれですか。

(N) わからんなー。

(Y) たとえばイギリスで三大詩人といったらだれでしょう。あるいは四大詩人……

(N) それは大体、自分では、まずシェクスピアですね。あとは、問題ですが、やっぱり、キーツでしょうね。

(Y) キーツですか。チョーサは入らないですか。

(N) ええ、チョーサもそうですけど、やはりちょっと考えるね。詩人というほどのことが言えるかどうか。……まあしかしチョーサはシェクスピアに先立つひとで……シェクスピアはチョーサを代表してそれを大きくしているわけですから、チョーサまで入れるべきかもしれないけど……それはそれとしてチョーサとシェクスピアは、その当時のヨーロッパとしても一番の文人なんです。14世紀では、イギリスにヨーロッパで一番の詩人チョーサが出た、それから16世紀の終わりでは、シェクスピアが出たということなんで、これこそイギリスだけの一番のみならず、ヨーロッパの一番なんです。

(Y) ミルトンはそこまでいかないですか。

(N) ミルトンはそこまでいかないでしょう。もうあとキーツに来てしまいますよね。

(Y) キーツですか。それからイエーツは……

(N) イエーツはもちろんいけませんね。

(Y) いけませんか。そうするとシェクスピアとキーツと二人しか出てこないんですけど。

(N) ええ、けれどそうたくさんわざと入れるということもできないから、三人目はないんじゃないですか。

(Y) 三番目はないわけですね。

(詩のころ。心の対話。西脇順三郎、山本健吉)

——ここに くっきり描かれた詩人世界地図の中に、キーツの名はシェクスピアの次にいち早くとび出したのに、バイロンの名は、遂に出なかったのは、まったく肩すかしを喰った期待はずれの失望と共にキーツと知己であったバイロンはあの世で苦笑しているであろうか。

湖岸詩人サウジー (Robert Southey, 1772-1843) がスコットの辞退した桂冠詩人を彼の推薦で受諾し、詩人、ジャーナリスト、書評者として活躍するや、桂冠詩人群を憎悪するバイロンはこれに噛みついた。

1809年に English Bards and Scotch Reviewers (イギリスの詩人とスコットランドの書評家) を発表してサウジーの叙事詩3篇を からかった バイロンは、さらに、

1819年 Don Juan (第1, 2巻) の出版の献辞の中でサウジーを 罵倒 した。1821年サウジーは A Vision of Judgment の序文で、売られた喧嘩を買ってでた。

バイロンは The Vision of Judgement で反撃した。

サウジーはバイロンを悪魔派 Satanic School と決めつければ バイロンは 5項目の質問を設けてサウジーの政治的背信と卑劣さを攻撃した。それは、理論的論争というよりむしろ感情的に、‘喧嘩’好きな 人間バイロン の姿である。

斯界の大権威者、西脇氏の 詩人バイロン評価 はこの、さらりとした何げない対話の中に、それとなく、いや、はっきりとうかがえる。

すくなくとも、バイロンがシェクスピアに次ぐ候補者群にその名をつらねるべき大詩人ではなく、さらに、第三位ランキング候補、第四位候補にも上ってきそうにもない。それにしても、バイロンの詩友キーツがためら

いなく第二位に推されたことはまことに皮肉であり興味深い。

悪魔派^{トリオ}三星の中で

キーツ (John Keats, 1795-1821) は、名門貴族出身のシェレー、バイロンと異なりロンドンの中産階級の企業家 (貸馬車屋) の子として生まれ、一時医学を志すが転回して——当時、‘詩人の巢’であったケムブリッジ大学にすすむことなく——自成の詩人として世に出る。

人格高潔、そして幻想感覚のすぐれた大詩人であった。当時流行の詩の様式に左右されながらも、イギリス、ヨーロッパのロマン詩の代表の一人になったばかりでなく、19世紀から現代に至る150年間にみられた詩観、諸派の目まぐるしい興亡から超然たる地位を確保する詩人となった。

(Douglas Bush; John Keats, p.11)

彼が悪魔派 Satanic School の一人と言われるのは、サウジーがバイロンの喧嘩を買ったとばかりをうけ、捲添を喰ったものと考えられるが、このトリオ (三星) には、当時の不安定な政治状況の中にあって、保守的な偽善の宣伝を憎む反逆精神という公約数があったことは確かだ。『気狂い』シェレーといわれ、『喧嘩』バイロンと言われた。だが、キーツだけは、悪魔派の汚名はふさわしくない。

彼の名誉のため、脇道にそれたが一言弁解しておく。

—バイロンには手を出すなよ！ 近づくなよ！ あとの祟^{たた}りが恐^{こわ}いぞよ！—

とにも角にも、西脇氏の評価の如く、このトリオの中でも、群をぬいてキーツが大詩人であることは今や、東西古今を通じての定説である。

3. 斯界の最高權威、齊藤勇氏バイロン評は、詩人バイロン、人間バイロンをずたずたに切り裂いた峻烈の極みであり、——後学の者のために、「感傷的態度をつねに排せよ」と警告される氏の——まさに名医の鮮やかな執刀ぶりである。

——1866年に Swinburne が Byron 作中の ‘a feeble and faulty sense of metre’ を痛論してから（たとへ、1920年代になって至って多少有利な批評があるにせよ）、彼の名声は到底昔日のようではない。しかも彼を ‘das grösste Talent des Jahrhunderts’（第19世紀最大の才幹）とゲーテ（そして Taine, Georg Brandes に至るまで）、が彼をイギリス詩人中、シェクスピアに次ぐ者と激賞した理由として次の三点を挙げている。

- (1) イギリス人の偏見と偽善を痛罵しつつ、イタリアとギリシャとの自由派と独立党とを援助したこと。
- (2) 彼の詩には演説的又は排優的表情と ‘a sad want of harmony’ とがあるので、翻訳によって失う所が最も少なく、又
- (3) 彼が奔放熱烈で自他一切のことを顧慮せずに大胆な活気ある自己表示をしたことなどであろう。

このうち (3) の点は彼の最大長所であるが、(2) の点はたまたま彼が詩人としてあまりに修辭的であって、更に重要な、表現の切実性に乏しかったことを暴露している。そして (1) の点については、彼が poseur であったことを思うとき、人は却って彼に対する反感をいさぐであらう。ただし、バイロンを poseur にした原因を思うとき、誰でも、この主我的な敏感な魂に同情を禁じ得まい。彼は自分が犯さない罪までも犯したかのようには吹聴して誇りとする ‘play-boy’ ではなく、自らの罪過に対して（そして彼には罪過が多かった）悔恨の情に堪えず、さればとて悔恨の情を表して彼が罵る一般人に自らの弱さを暴露するを好まず、あくまで強者たる誇りを示そうとして、遂には Venice における淫蕩生活にまでも墮落するようになったのである。……

(齊藤 勇著作集第二巻 346頁)

——まことに手厳しいバイロン評である。しかし、果して、ゲーテがバイ

ロンを世紀の生んだ天才と激賞したとき、その心情は上述の3つの簡単な理由を基調とするものだったのだろうか。

この点（あまりにも明快に過賞としてを片づけられたことに対し）もっと深く（又の機を得て）掘りさげてみたいと考えている。この同時代の二人の天才の肝胆相照し合った詩魂が片や、Don Juan 片や Faust の両大作に、はっきりと観られるのではないだろうか。それがゲーテの激賞の意図ではなかったろうか。（この二つの酷似するとされる大作を又の機を得てとりあげることとして）

今は、ただ、上述二つの詩、

(1) ‘この日、ぼくは三十六歳を終わる’——バイロン

(2) ‘昔ツウレに王ありき’——ゲーテ

を、敢へて全詩を比較対照させたのは、詩聖ゲーテの心情には、 H_2O 的に分析できない *exited passion* いや、もっと *elevated* された *emotion* がこみあげ、さらに、それが *aufheben* されて、この二人の天才詩人が肝胆相照らしての激賞の出葉だと観るのは氏の最も嫌われる感傷の弊害、陥し穴であるのだろうか。

しかし、

(1) 同時代の詩聖ゲーテの激賞のことばであったこと

(2) バイロンが独得の創作法（即ち、瞬時の激情のみ重んじ、推稿は意味なしとして意識的に避けた）をとった、

つまり、創る努力をしなかった自己投影の詩人であったこと

この二つの点に、過賞か否か 検討すべき問題点があるのでは——。

これは私の疑点であり、反論したい気持である。バイロンが（私にとって）、憧憬の詩人であり、バイロン研究の出発点が多くくの学徒にとっても、そうであるだろうから。（但し、この巨匠が、ゲーテが過賞したとあっさり片づけられた根拠は数々あるのだが）

4. 上杉文世氏の著バイロン研究はバイロン評を次のようにのべている。

——19世紀の世界文学史の中で、ひととき異彩を放つバイロンを、ゲーテは、「19世紀最大の天才」¹⁾ と称えたのをはじめ、ヨーロッパ大陸においては、シェクスピア以来、イギリス第一の詩人とする高い評価は不動のものとなっている²⁾。

その上、バイロンの作品が、文学の枠をこえて、絵画や音楽の領域にまで及び、「飽くことを知らぬ創作欲」の源泉となってきた事実は、cosmopolitan としてのバイロンの一端を表わすものであろう。

ところが、母国イギリスにあっては、^{きよほうへん}攻誉褒貶半ばし³⁾、いわゆる Bylon mystery⁴⁾ によって、バイロンの詩人としての評価が、長い間曇らされてきた事実は否めない。今世紀の中葉に至ってもなお、

Ay me! what perils do environ
The man that meddles with Lord Bylon!

ああ、バイロン卿に手出しする者は
何という危難が取り巻くことだろう!

-
- 注 1) Goethes Gespräche mit Eckermann, July 5. 1827.
 2) Taine, Brandes, Musset, Pushkin, の讃辞。そして、19世紀だけでも、Harold は10ヶ国語、41以上の翻訳、Manfred は12ヶ国語、34の翻訳がなされた。
 3) ・バイロンの死後、熱がさめるにつれ、評価は下り坂となる。
 ・ビクトリヤ期、Kingsley が、支持、Thackeray 以下、批判。
 ・1866、Swingburne が擁護してよら上向きとなる。(晩年、攻撃に転じた。)
 ・Arnold はシェレー、キーツ以上に高く評価。(叛逆精神をかって)。
 ・Ruskin, Movley, Austin は支持。
 ・Salntsbury はバイロンの凡庸をつき
 ・Collins は逆に偉大さを称え
 ・Ker も弁護
 ・今世紀、最大の攻撃者は Bertrand Russel
 4) Ralphmielbanke, Earl of Lovelace, A Fragment of Truth concerning Lord Bylon(1905) によって、バイロンへの道徳的誹謗は決定的となった。

と慨嘆され、

Herbert Read が、(Read, op. cit., p. 7)

「詩を道徳的に批判しようとするなら、証拠は詩そのものの中に求められるべきである」と戒めねばならなかった事実も、またバイロンが没後 145 年にして、やっと Westminster 寺院の Poets' Corner に迎えられたという事実も、バイロン評価の曲折の一端を示す。この評価の落差の大きさは、善悪、美醜の両極に激しく揺れた、詩人の強烈な個性の証しであろう。——

(バイロン研究 p. 3-p. 4)

このように、氏のバイロン評が、詳しく例証されて、詩人の評価の落差のよってきたる根拠を詩人の強烈な個性のゆえだとされたことはまことに、敬服し、同感であり、バイロン評として、温たかく、寛容であり同情的である。

その強烈な個性の根源を 次の課題、あらしと非運の家系でさぐってみたい。

ともあれ、145年を経て、やっと詩人が、Westminster 寺院の Poets' Corner に栄光の殿堂入りしたことについては、詩人の魂は、これを、はっきりと、拒否することを信ずるのであるが、イギリス人の保守的な一面を如実に示すものであり、痛快なこのジョンプル ‘John Bull バイロン’ を ‘ジョンプル’ が拒否したことに Washington Irving は苦笑しているだろう。

5. さらに(バイロン研究では最高権威であろう)、上杉文世氏バイロン評は、バイロンの創作法と自己矛盾を指摘され、自我的バイロンの歩(あゆみ)を明快にされ、心温まるものがある。

——‘excited passion’ のみを創作の糧とする創作方法は、程度の差こそあれ、ロマン派詩人に共通するものといえようが、なかでも最も極端な例として特筆されねばならぬのが、Burns から Byron への系譜である。例え

ば Walter Scott が、「バイロンは衝動で創作し、決して努力による創作はしなかった。それゆえ、私は、現代及びここ 50 年の間では、Burns と Byron が最も純粋な天才詩人だと思う。高い詩才に恵まれた人は多いが、この二人のように、絶えまなく湧き出る泉は他にない」と指摘した点が注目される。このような二人の詩人の創作法は、まさしく、‘The way of self’であり、また、‘The way of intuition’である。

強烈な生活体験そのものを、詩人自身の肉や魂に変え、そこから閉ざされた世界を、詩行として湧き出させるのである。これはひいては、Lawrence, Rilke そして Dylan Thomas の方法であり、さらに Nietzsche も、その例外ではない。自己の熱情を、大胆かつ卒直に詩行に移した創作法も、中庸を嫌って極端に走り勝ちであった性格も、バイロンとバーズは酷似している。ところが、バイロンのバーズ観は、極めて主観的であり、屈折している。バーズの作品や書簡の読後感を記したバイロンの日記の一節に ‘What a wreck is that man!’ と感嘆したり、「柔和と粗暴、繊細と野卑、情操と官能、理想と低俗、獣と神——すべてが渾然と一人の天才の中に同居する——何と相背反する要素を心に秘めた人よ、！」と、まるで、われわれの耳には、バイロン自身を語るかに響く言葉で、しかも驚きをもって Burns を評している。これは、バイロンがいかに自己を知らない人であったかを物語る。他人を冷静に観ることはできても、自己を客観視することは、バイロンには大変な苦手であったらしい。

ロマン派詩人の一つの典型とも見做されるバイロンが、実は、同時代の詩人の中で、或る意味では最も古典主義的な理念を持ち合わせていたという事実も、バイロンに潜む宿命ともいうべき自己矛盾の一つとして看過できない。

(バイロン研究 p.12-13)

このような、詩作法及び自己矛盾が、いかにも天才的一面を物語るもので、氏もその点を温く微笑してバイロンを見守っているが如く感じられる。かくしてバイロンは Pope に傾倒し、Pope を軽侮するものを敵として徹

底的に痛罵した。のも、自己矛盾のうちに凡庸ならぬ一面をはらんだ詩人である。……………

天才とは unbalance である と逆説的に言えるのではないだろうか。自己矛盾に苦しんだが故にあまりにも完全を追求した意味において Byron was a perfectionist!であった。

人間バイロンか、詩人バイロンか、その結論を急ぐ前に その、呪はれた血 his family blood をまず、洗って みななければならないだろう。

バイロンの強烈な個性は祖先継承の先天的なものであり、それが、そのまま作品に投影された。その呪われた血に 異常なまでに誇りを抱いたこと、に、彼の生涯を揺さぶり続けた宿命の悲劇があった。皮肉があった。彼が、異常にまで誇った家系に果して誇るべき、何があったのであろう。呪いの血 cursed blood しか出てこない、と、彼は、自嘲し、悶え、のたうった。そして、^{てら}銜い、^{ふうし}諷刺へと三転していった。

「目ざむれば、一朝にして、早や、有名になりにけり。」と、一躍、詩界のスターダムにのし上がったときのバイロンの得意の句であり、その因となったのはチャイルド・ハロウルの巡礼記である。名門の貴族出の誇りと自嘲、の交錯した複雑な一面をうかがうことができる。

Child Harold was he hight:—but whence his name
And lineage long, it suits me not to say;
Suffice it, that perchance they were of fame,
And had been glorious in another day:
But one sad losel soils a name for ay,
However mighty in the olden time;
Nor all that heralds rake from confined clay,
Nor florid prose, nor honied lies of rhyme,

Can blazon evil deeds, or consecrate a crime. (*Harold*, I. iii)

(訳)

“貴公子 チャイルド ハロウルド殿
しかし、その名の由来する血は秘めおこう。
そのかみの気貴く榮ある^{やから}族とぞ
言ひおく ことで みち足りよ。
昔は昔、蕩児出て、悲しきことぞ
とこしへに その^{ほまれ}誉をば^{けが}穢したり
^{ひつき}柩をおこし^{ふれもの}紋章官が^{いさを}功績をたゝへ、
華麗なる^{ふみ}文も^{うた}甘美な詩とても
消ゆまじ 汚れし 罪 深きゆえ。”

〔IV〕呪われた血—非運の家系

Bylon 家、Gordon 家（母方）の家系図を開いて彼の祖先の血を探ってみよう。

あらしと非運の家系

ジョージ・ゴードン・バイロンは1788年1月22日、ロンドンの Holles Street 16 番地に生れた。

詩人バイロンは、すなわち、第6代バイロン卿である。

(1) Bylon 家の歴史

バイロン家はイギリスでは最も古い由緒ある家柄のひとつで、11世紀頃は Burun ブルン家とよばれた古代ノルマンの豪族であった。

1066年、その豪族のうちの一人が、ノルマンディより征服王ウィリアム1世に随従してイギリスに渡来。次第に Nottingham, Rochdale および Clayton を領有する。

1170年、Henry II. Thomas à Becket 殺害の贖罪のため、Newstead Abbey

を建立。

エドワードⅢのとき ジョン・バイロンが、カレーの包囲戦でたてた勲功によって、サー（準男爵）を授けられる。

1540年、その後裔のひとり、「大きな髯をもっている小さなサー・ジョンが、Henry Ⅷ からニューステッド・アベイ（修道院）および付属地の払い下げをうけてから、その子孫は忠実にそこに住んで動かなかった。

1643年、その家系の一人、サー・ジョン・バイロンは、チャールズ1世の忠実なる支持者として騎兵隊を指揮し、もちまへの蛮勇をふるって無鉄砲な戦闘を行つたが、その戦功によって、国王からロッチデール、の男爵 Baron に叙せられ、イギリスの貴族に列せられた。初代 Lord Bylon of Rochdale 誕生。

Richard, 2nd Lord Bylon

William, 3rd Lord Bylon は17世紀頃まで生きていたが、このころから、むかし修道院だったニューステッドの邸館にまつわる不吉な予言がしだいに現実となってあらわれるようになってきた。そして

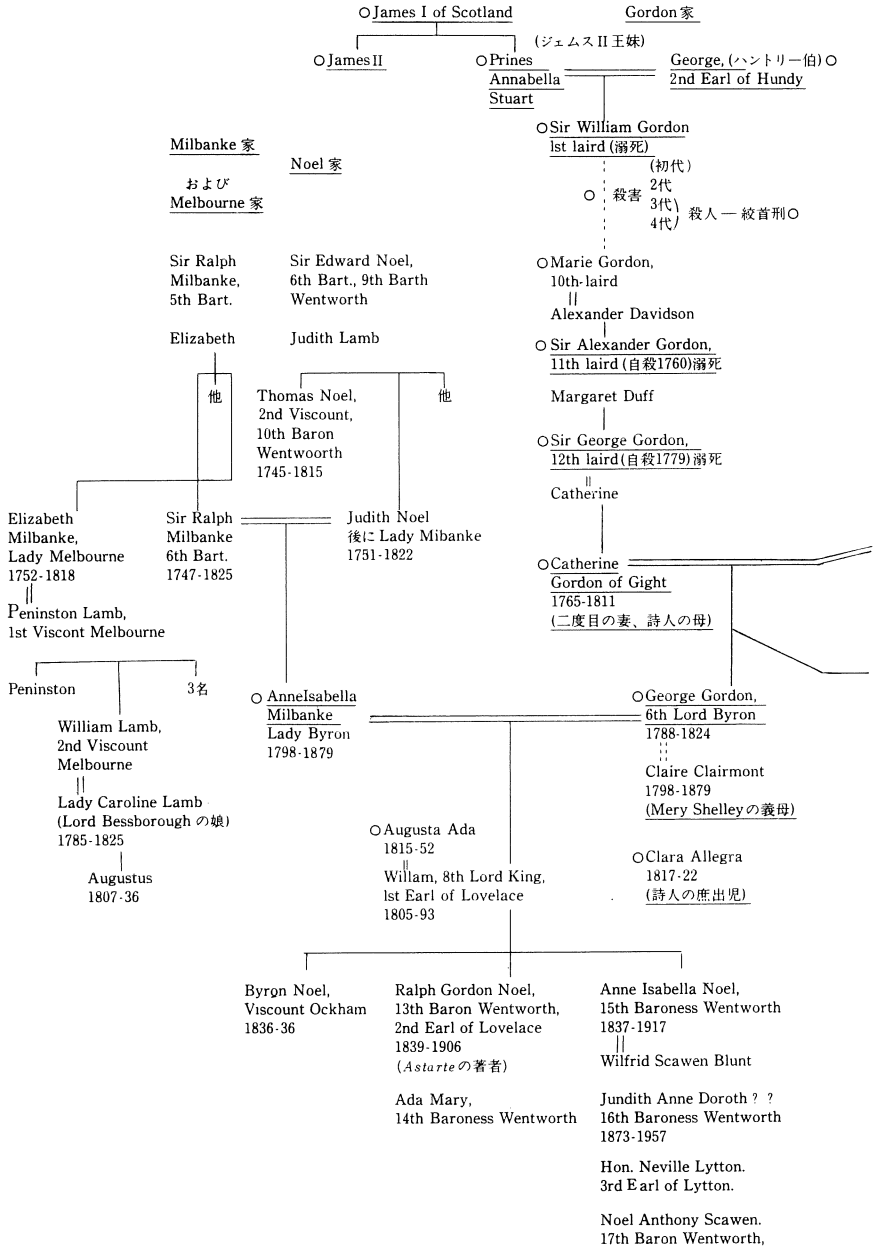
(1669~1736) *4th Lord Bylon William* は三度目の妻 Frances との間に

(1722-1798) *5th Lord Bylon William* を生む。

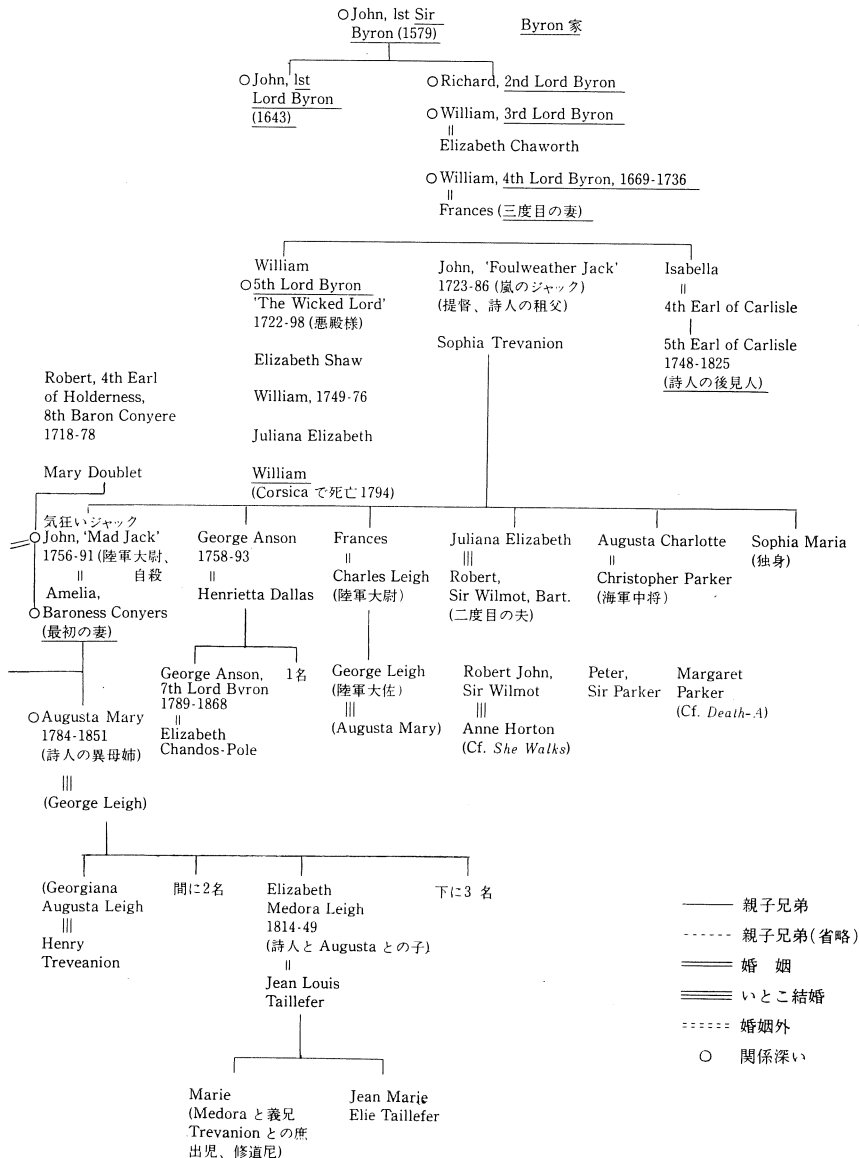
この5代目は、隣家の^{いとこ}従兄弟の Chaworth を、ロンドンの居酒屋で、口論の末、決闘し (1765)、殺し、貴族院の査問をうけ、貴族だけに適用される特別法により無罪釈放となった。しかし自由の身となってニューステッドに戻つてからも、狂気じみた悪行を重ね、「悪殿様」とよばれ嫌われた。しかし、

その弟の *John Bylon* (1778)——詩人の祖父——は、まっとうな海軍提督として豪胆な性格で、アメリカ独立戦争に艦隊を指揮。やはり運命の星を背負い、海上に乗りだすとたちまち暴風雨の襲来にあい、「あらしのジャック」とよば

バイロン家系図



バイロン家系図



れたが、勇猛な提督だった。

John Byron (1756-1791) は名海軍提督の長子。詩人の父。フランス士官学校を出て、帰国、近衛連隊の士官。陸軍大尉。20才でアメリカ独立戦争に出征。非常に美男子であったが、むこうみずな行動と賭博による莫大な負債のため「気がいジャック」と綽名された。

22才のとき、ロンドン上流社交界の最も美貌のカーマンスン侯爵夫人と恋におち、駆け落ちして、フランスで、彼女は
1783年 娘、オーガスタ・バイロンを生み（詩人の異母姉）1784年、死亡。
1785年、John Byron 大尉は *Catherine Gordon of Gight*（ゴードン家の令嬢。詩人の母）と結婚。

キャサリンは小ぶとりの、美人とは縁遠い女性だが、両親に死別、2万3千ポンドの遺産を相続していたので、負債に苦んだ大尉はこの女性と結婚した。以上、バイロン家の家系であるが、次に母方ゴードン家の家系を概観してみよう。

(2) Gordon 家の歴史

詩人の母、Catherine の生家ゴードン家は、スコットランドのアバーディーンの高貴な名門の家柄である。

初代のガイト荘園の領主サー・ウィリウム・ゴードンの父は、ハントリー伯爵であり、母は、イングランド王ジェームズ、II世の王妹アナベラ・スチュアートであった。

しかし、このように栄光に輝いてはじめられた家門の歴史には、つねに不吉な運命がつきまとい離れなかった。

初代ゴードンは溺死し

第二代、アレキサンダー・ゴードンは殺害され

第三代及び第四代両ゴードンは殺人をおかし、絞首刑に処せられ

そののちの代々の莊園領主たちも、兇暴な悪行をつづけた。

キャサリンの父も祖父も、同じように溺死している。

令嬢キャサリン（詩人の母）は、ダッフ家の出の祖母に育てられ、スコットランドの国民性である嚴格で勤儉な気質に鍛えられたのであるが、やはり、ゴードン家に伝わる過激な性情と衝動的な行動力とを残らず稟けていた。

バイロン大尉（詩人の父）の美しい風貌に接するや、彼女は、たちまち前後も顧みない熱烈な愛情に燃えたち、この危険きまわる人物と結婚した。

新婚まもなく、バイロン大尉は、放蕩癖をあらわし、ゴードン家の莫大なる財産を蕩尽、債鬼をのがれ、夫妻はフランスに渡る。

そこでも賭博と酒色に耽り、金をせびるときだけ妻のところへ帰るといふ有様だった。

キャサリンはスコットランド女性独特の美德を發揮し、節儉の生計をたてていた。

妊娠して産期が近づくと、ロンドンに戻り、1788年1月23日、男子を生む。

この子がガイドのゴードン家を相続してゴードンの名のみを譲られた。即ち詩人バイロンである。

まもなく、^{みどりご} 嬰子をつれ故郷アバーディンにて家具つきのアパートを借る。

相変らず放蕩のバイロン大尉は、金をせびりにくるが

1790年の末頃、ふたたびフランスに渡り、翌年の夏、窮迫のどんぞこで死んだ。

以上が、母方、ゴードン家の家系であり、そして、——バイロン家との接点において、この詩人が生い立たねばならなかった——

ということが、‘血の詩人’バイロンを端的に極言するのではないだろうか。

詩人の強烈な個性は、英国では、最古の名門貴族の出身であるとの強い誇り——それは異常なまでの——からくるものであったが、その家系の血が彼の美德、背徳として渦巻いたゆえに苦悩に喘ぎ悶えなければならなかった。誇りと自嘲が表裏一体となり、残忍と陽気、粗野と気品、自由への熱望と野蛮への奴隸化、を逆説的に雑居させた詩人の心の瞬時の揺れがバイロン文学の光であり

しからずんば発狂への屈従となったであろう。この unbalance を調和美として完成したことが凡庸でない 詩人バイロンの偉大さとしてこれを讃えるべきである。

〔V〕お わ り に

人間バイロン即詩人バイロンへと止揚されたが、この詩人を創りあげた要因^あを挙げるならば

1. 血なぐさい、そして非運なる家系への強き誇りと 宿命的な激しい気性
2. 幼、少年期の厳しい宗教的教育、さらに迷信的母親の唱えた、離魂 fetch, 前兆 forewarning, 透視力 second sight の影響。その矛盾。
3. 誕生のとき背負った跛^{びつこ}の障害。藪医者^{びつこ}が、幼い詩人に施した手当は、木製の器具で足を締めつけることであった。これが反逆精神 一情熱一自己の不完全への認識—絶対への志向—をよき意味で、さらに、ゆがめられた意味で、劣等感—自嘲—揶揄—諷刺—そして 矛盾の詩人 をつくりあげたことは見逃せない。遠泳の謀挙1810年是有名である。
4. 18世紀～19世紀の動乱の時代の嵐に立ち向ったこと である。

フランス革命、ナポレオンの出現、没落^{いろうど}、が彩る動乱、混乱の18世紀～19世紀は、文学の世界では浪漫主義が潮の如く高まった時代である。

バイロンはこの時代を象徴する詩人であった。

放蕩貴族の父は家をして、スコットランドの田舎町で、或いは、暗いバイロン家の古城の廃屋で母と少年バイロンは淋しく生い育った。

幼年期—誇り、と強い自我 と憂愁、

少年期—思慕と意地っぱり、

青年期—驕慢と奔放な蕩児

としてケムブリッジ大学を卒へた。

青春の情熱と憂愁のゆえに苦痛^{もた}に悶え、耐えかねて巡礼の旅へと発つのであ

るが、そのチャイルド、ハロウルドが「一朝にして高名」となり、詩人は、絢爛として社交界のプリンスとして、上院の若き獅子として熱狂的歓声をもって迎えられた。やがて、しかし、——カロライン、ラム、異母姉オーガスタ、アナベラ、クレラと、いくたの女性との愛欲絵巻き図をくりひろげ祖国は彼を国外追放した。

追放後の詩人は、さらに、グリチオリ伯夫人との愛に耽溺し、悔恨と憂愁の日々を重ねるが、最後に、彼の義侠心は死地をもとめて最後の彼岸への到達を決意した。バイロンは、その生涯が、自ら描いたドラマであった。神であり悪魔であった。さわぐ血のゆえに、弱さと強さ、高さと低さ、美しさと醜さを浮彫にした詩人であった。

興、到れば、立ちどころに成るといふ、天成の奔放な想像力を駆使して、おそるべき速さで数多くの作品をのこした。

詩人、みずから、「ほくは、自分の経験や下地がなくては、何事も書くことはできない」と言った如く——バイロンは投影の詩人であり、人間バイロンの強烈な個性、体験が、すなわち、“血に呪はれた”バイロン文学の本質である。

(未完)

(付記)

この拙稿を草するにあたり上杉文世氏、斉藤正二氏の名著をとくに、参考させていただいたことを深謝致します。

参 考 文 献

- 1) Franks, M. Doherty: Bylon. Evans Brothers.
- 2) John, D. Jump: Bylon. Routledge & Kegan Daul.
- 3) Ernest Hartley Coleridge: The Poeticalworks of Lord Byron. John Murray.
- 4) Bernard Blackstone: Bylon, A Survey. Longman.
- 5) Steffan, T. G. Steffan, E. and Pratt, W. W.: Lord Byron, Don Juan. Penguin English Poets.
- 6) 加納秀夫, 増谷外五, 亀井俊介: 英米文学史Ⅲ巻, 詩, 大修館
- 7) 上杉文世: バイロン研究. 研究社
- 8) 斉藤勇: 斉藤勇著作集第2巻, イギリス文学史. 研究社
- 9) 日夏耿之介, 鈴木信太郎, 石川道雄, 神西清: 名詩名訳. 創元社
- 10) 斉藤正二: 世界の詩集4. バイロン詩集. 角川書店
- 11) 西脇順三郎, 山本健吉: 心の対話, 詩の心. 日本ソノ書房
- 12) 小川二郎: 英詩講読. おぼろん社
- 13) 小川二郎: 文学論集. 広島大学文学部
- 14) 阿部知二: バイロン詩集, 新潮社
- 15) 笹淵友二: 波漫主義文学の誕生, 明治書院